
溢れでるもの

松谷ソウイチロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
溢れでるもの

【Nコード】
N7581B

【作者名】
松谷ソウイチロウ

【あらすじ】
田中三郎は、鯖はらについて考えていた。スズキ目サバ科に属するあの鯖である。

田中三郎はその時、鯖さばについて考えていた。スズキ目サバ科に属するあの鯖である。

年齢を誤魔化す時によく使うあの鯖である。

三郎が自己防衛をする時によく使う手法である。

電車のドアに寄りかかるようにして、ぼんやりと外景色を眺めていた。

鯖のことを考えながら。他のありとあらゆる思考が入り込む隙間もなく。そう意識して。

車両の中で立っているのは三郎だけで、他の乗客は

座席に座り、文庫本を読んだり、携帯をいじったりしていた。

延々と同じような田園風景が続き、辺り一面はひっそりと静まり返っていた。

田を耕す老人の姿を見つけようとすると、呪いに掛けられた不吉な街のように

人影はまったく見当たらなかった。

「ふー」

思わずため息が漏れる。その声の大きさにすぐ隣に座っていたOL風の女性が

こちらをちらりと見やる。

三郎は決まり悪くなって、素知らぬ顔をして何も気づかない振りをする。

車内にこもった生温い空気のせいで、三郎は背中にじんわりとした汗をかく。

中に着ているTシャツがべたっと背中貼り付いているのが分かる。白いTシャツは傍目からは首元しか見えないが、その部分はもうよ

れよれになっっている。

今朝鏡の前に立ったとき気がついたが、そんなことはもうどこでも良いことのように思えた。

しめ鯖、塩焼き、鯖味噌。

刺身にしても食えるかな。

鯖のさしみなんて聞いたことないけど。

電車の心地よい揺れに身を任せながら、相変わらず、鯖に関する無駄知識で頭の中を一杯にする。子供の頃、百科事典で調べたことのある内容を、搾り出すようにして思い出し、頭の中で反芻させた後から、鯖の調理法についてシュミレーションしている。

「さば、さば・・・」

思わずまた囁くような声が口元から漏れる。

先ほど振り向いた女性がまたも、三郎の独り言を聞いてしまったよ
うで、

またこちらを見る。目には嫌悪の色が浮かび、露骨に三郎を睨んでいる。

三郎は肩をすくめ、また外の景色に目を移す。

相変わらず、町は死んだように眠っている。

おそらく、電車の走る音だけが、今この町に響き渡る唯一の雑音だろう。

あるいは、電車の音でさえ、この町には安らかなメロディーとなつて響いているのかもしれない。そう思わせるだけ、目の前に開かれた景色は穏やかに見えた。

さば、サバ、鯖、S A B A。

音とならないように細心の注意を払いながら、頭の中を鯖の大群で満たす。

群れの流れが決して途切れなないように、絶え間なく。

「さば、さば、さば」

その時、電車が駅に到着し、二人組みの男女が乗り込んでくる。老人と子供。おばあちゃんと孫。腰の曲がったおばあちゃんのしわくちやの手を、

男の子が包み込むように優しく握っている。

男の子が、甲高いキーンとした声で何か叫んでいるのを（それはおそらくおばあちゃんにしか理解できないのだからうけど）おばあちゃんがつんつん、と満面の笑みで聞いてあげる。

それは一瞬の光景だった。

しかし三郎は、その光景に目を奪われ、そして言葉を逸した。

顔から表情が消えていくのが自分でも分かった。その代わりに、胸にこみ上げてくる温かいものを感じた。それは全身にじわじわと染み渡り、指先にまで温かく伝わった。

指先を越え、体全体を包み、オーラのように全身にまとわりつき、それでも広がることを止めず、空気の中に溶け込まれいく。

唇が震え、かさかさと言音が鳴った。

しまった、と思ったが身体はもう言うことを聞かなかった。

身体が粟立ち、血の巡りが活発になるのを感じる。

血は足元から、内臓を通り逆流し、頭のとっぺんにまで容赦なく動き回る。

思考が完全に停止する。眠っていた町の風景は色を失い、モノクロとなつて三郎の瞳に映る。

涙がこぼれる。

押さえ込めていた感情が全身に溢れ出す。

小さい頃から、いつも僕の味方であった人。

帰りの遅い両親に代わってずっと僕の側にいてくれた人。

万引きをして警察に捕まった時、僕の代わりに必死で謝ってくれた

人。

僕を自分の宝物だと言ってくれた人。

そして、もう二度と話をするにはできない人。

感情はとめどなく溢れ出し、喉元から突き上げる悲しみが
声にならない嗚咽となって表れる。

「う、う、ううう」

どんなに理性で誤魔化そうとしても、感情はそれを許してくれない。
理性を越え内側からとめどなくあふれ出してくる。

堤防を越えた津波のように、一度溢れ出した勢いは簡単には止まら
ない。

全身から力が抜け、その場にペタンとしやがみこむ。

「あんたは、私の宝物じゃけー」

祖母の顔が脳裏に浮かぶ。

田舎を飛び出し、祖母の死に目にも会えなかった自分。

その深い愛情を時にうざったいものとして、嫌がっていた自分。

あの愛情をどうして素直に聞き入れることができなかったのか。

そして、今どうしてその悲しみをくだらない小細工で滅しようとし
たのか。

三郎は倒れないように精一杯手すりを掴み、声を上げて泣き出した。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

そうはつきりと声に出して言った。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。
感想をいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7581b/>

溢れでるもの

2010年10月16日18時37分発行